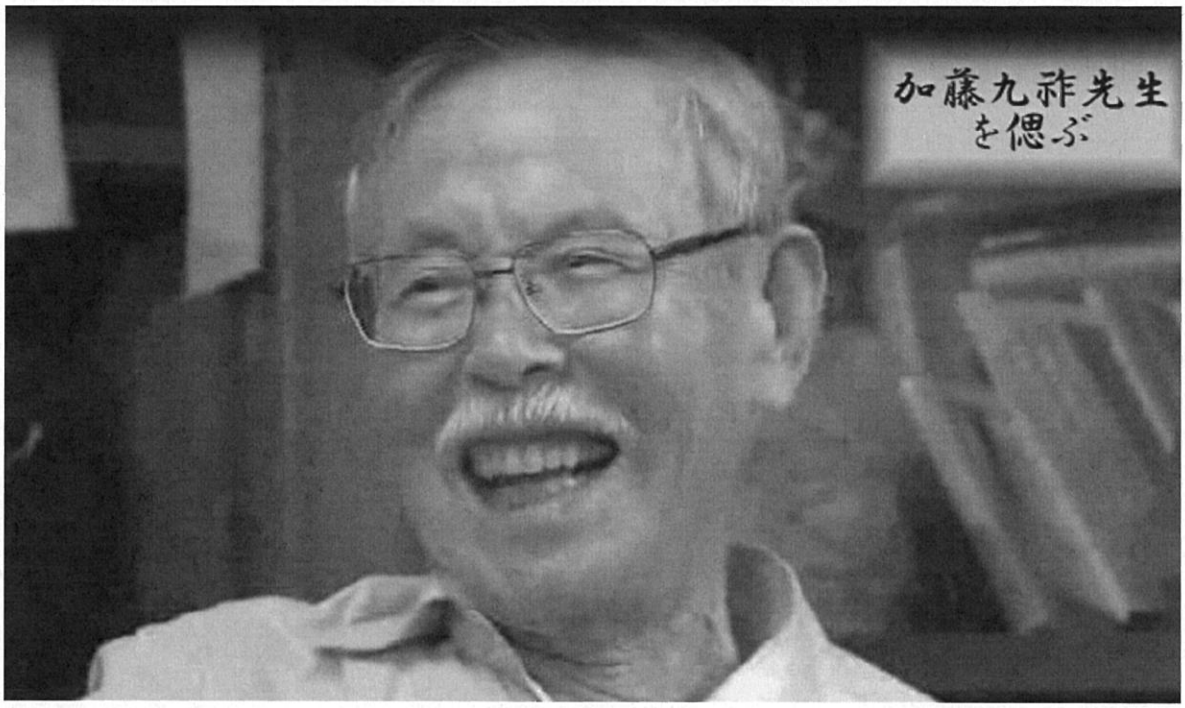
ユーラシアンホットライン

【ニュースレター178号のトピック】

NPOユーラシアンクラブ・愛川サライの2017年度の活動



① 5月5日　日本橋三越本店「みんなで作る三越屋上アジア・シルクロード音楽フェスティバル」開催
シルクロードユニオン実行委員会が発足　外務省後援

② 7月23日から、外務省日露青年交流事業で、愛川高校和太鼓部卒業生ユニット「打縁」が訪ロ
サハ共和国ヤクーツクで第8回愛川町音楽祭、
ハバロフスク、シカチアリャンで先住民族芸能祭でガラコンサート
パンチャラマユニット「チョウタリバンド」と木村俊介も参加
「テティム受け入れ実行委員会」が派遣費用の一部募集

③ 「加藤九祚先生を顕彰する会」準備会（設立発起人会）が、顕彰活動を準備
・ウズベキスタン大統領がテルメズに6.5ヘクタールの「加藤九祚記念公園」を提案
ウズベキスタン大使館の要請にこたえて、記念公園コンサルタント設計に黒川紀章事務所をあっせん
・キルギス・クラスナヤレーチカに加藤九祚記念　顕彰碑、クラスナヤレーチカ村に「加藤九祚コーナー」
・シカチアリャン村に「加藤九祚記念・環日本海交流/エコカルチャーセンター設置を提案
・9月12日に、加藤九祚先生弔問ツアーを提案

時空を超えたアジア・シルクロードの終着駅日本橋で「民族文化の祭典」

10年越しの懸案実現

NPOユーラシアンクラブの本部事務所を新宿から、日本橋室町一丁目にして移転して以来、アジア・シルクロードフェスティバルが、三越日本橋店で開催されることを指向して準備してきました。

私が20年近い「アジア・シルクロード音楽フェスティバル」の活動の結果たどり着いた「アジアの四弦の音楽史」と「三絃の音楽史」が大阪で邂逅し、日本橋で江戸歌舞伎誕生の背景となったという提案は確固たるものですが、

日本の音楽の常識や教科書は、日本の三味線について「南方起源論」の域を出る常識以外の情報はなく「常識の間違い」を正す、未だにアジア理解の入り口にも立っていないのが現状です。江戸歌舞伎が誕生した日本橋三越本店が、シルクロードの文化史、アジアの音楽史の時空を超えた終着駅であることをメッセージとして送る場所としてふさわしい場所だったのです。今回の催しを契機としてユーラシアンクラブは、「シルクロードユニオン」に結集するアジア人が運営する新しい段階に進化します。

サハ共和国、ハバロフスク市、シカチアリャン村で「アジア・シルクロード音楽フェスティバル一笛と太鼓の祭典

8 年越しの愛川町とサハ共和国の交流ーハトラエフ夫妻との 20 年目の節目

サハ共和国国立劇場専属音楽家ハトラエフ夫妻と初めて出会ったのは 1998 年夏、私が新潟県小出町で、諸民族の交流祭として「ユーラシアンフォーラム」を開催したとき、当時サハ共和国在日代表部の首席として来日していたバラムィギンさんを通してゲルマン・ハトラエフを前年の 1997 年に招へい完成度の高い、シベリアンエコーとでも表すべき音楽表現を聴き、翌年夫妻を招へいして以来のお付き合いである。その後毎年のように各地で、アジア・

シルクロード音楽フェスティバルを開催し、アジアの多彩な音楽を紹介し、途中5年ほど、作曲家の故、三木稔さんと一緒に活動した。その過程で、ハトラエフ夫妻から、サハ共和国にはたくさんの種類の太鼓が博物館にあるが、今では演奏方法もわからずに眠っており、復活させたいと、佐渡島の鼓童を紹介してほしいと依頼された。夫妻と佐渡島を訪ね、その後鼓童の「アースセレブレーション」にも参加、鼓童メンバーとハトラエフ夫妻との共演をしたり、金子竜太郎氏らがサハ共和国を訪問し演奏指導したり、鼓童のシベリアコンサートツアーを実現し、私もコーディネータとして協力した。私は、名古屋で開催された地球博に際して演出家でもあるアンドレイ・ボリソフ文化大臣の音楽劇「キースデビリエ」の日本初演のプロデュースを一カ月前に要請され、苦労したが、無事彩の国さいたま大ホールでの公演を成功させることができた。その中で、ハトラエフ夫妻から、子供たちの太鼓グループを立ち上げたこと、日本での研修を希望していることを何度も知らされ、最終的に私が住む愛川町で受け入れることになった。2010年夏、初めてテティムの子供たち15人が来日、愛川町の繊維産業会館の和室で受け入れ、町民に協力を呼びかけ、送迎、朝昼晩の食事の世話、日本の暑い夏をしのぐため、ジュースやお茶、スイカの差し入れなどを仰いで、多くの支援を得ながら、元鼓童の金子竜太郎氏による和太鼓の基本技術の習得から楽曲の作成まで、一週間にわたり研修が続き、最後には、愛川町の夏祭りのお囃子など伝統文化との接点も考慮した「アジア・シルクロード音楽フェスティバル　笛と太鼓の祭典」としてプロのミュージシャンも参加する、完成度の高い発表を目指して音楽祭が開催された。この受け入れは、東日本大震災に伴う原発のメルトダウンを考慮して2年間受けれを中、修受け入れの要望は続き、再び受け入れが始まった。この間、テティムの子供たちの成長ぶりに感動したサハ共和国の親たちは、自分の子供たちをテティムに入れるようになり、当初10数人だったテティムメンバーは、150人を超えるまで拡充、2014年に行われたサーカス劇場でのテティム5周年のコンサートには、私や愛川高校和太鼓部を創設した赤川猛さん、和太鼓部一期生の綱島健司さんが参加、綱島さんはオープニングにソロ演奏を披露し、満員の聴衆の心をつかみ、テティムと一緒に演奏して喝采を浴びた。テティムの愛川町訪問はその後も続き、2年前からは、ハトラエフ夫妻音希望で、春と夏、年2回のテティム派遣が始まった。しかし、昨年に入って急激にロシアの通貨ルーブルの下落で、テティムの親たちが子供たちを派遣することが難しくなり、昨年春には、テティムからのメッセージビデオをオープニングで紹介し、第7回愛川町音楽祭は開催された。この音楽祭を通して、「サハから来れないなら、愛川町から行こう」という考えが生まれ、国際交流基金に相談した毛か「滞在費を受け入れ側が負担すること、サハだけでなく複数個所での音楽祭の開催」が条件とされ、この指示に沿って、サハ共和国だけでなく、ハバロフスク市、シカチアリャン村でも音楽祭やワークショップを開催、ハバロフスク地方政府は、国連の先住民族の十年事業の一環として、愛川町からの代表団受入のため、アムール流域の先住民族芸能祭を開催し「極東のリズム」をテーマとした音楽祭を開催することが決定された。

しかし結果は、国際交流基金は私たちの派遣申請を却下した。審査員の狭い料簡によるものと考えざるを得ない。

外務省ロシア課の理解によって、「打縁」の青年の派遣は実現したが、愛川町音楽祭を支えてきたプロのミュージシャンの派遣が課題となった。私は、アジアの笛と太鼓の表現文化が共通の音楽表現の土台となることを期待しており、ヨーロッパや日本を含むアジアの横笛の起源とされる北インドからネパールにかけたヒンドゥスターに音楽のバンスリ（横笛）を視野にして音楽祭を企画してきた。今回のヤクーツク、ハバロフスク、シカチアリャンでの音楽祭でもプロのミュージシャンは欠かせない。

今回派遣されるプロのミュージシャンは、ネパールのバンスリの天才パンチャラマ、とタブラの名手サラバンラマ、チョウタリバンドの3人と篠笛の名手で津軽三味線全国大会チャンピオンの木村俊介ら四人。

派遣に必要な経費約80万円のうち、30万円は何とかめどがついた。あと50万円を確保するため、下記のようなお願いをしたい。

8年越しの和太鼓研修プロジェクトで、現地でサハ共和国の伝統音楽復興と愛川町の伝統文化振興（60年前失われた八菅神社の奉納太鼓の再生等）に大きな役割を果たし、地域の文化団体として影響力を発揮して貢献するようになった上で、今回の、音楽ツアーは、①サハ共和国のテティムと愛川町の若者演奏交流とサハのプロのミュージシャンとネパールや日本のプロのミュージシャンが表現する完成度の高い音楽の交流を実現する②国連の先住民族の10年の一環として極東アムール流域の先住民族芸能祭を開催して私たちを受け入れる、ことになった。

上記資金を確保するためご寄付いただいた方には、今回現地で開催する3か所の音楽祭のご報告と記録DVD、交流記念グッズをお届する。寄付は一口五千円。

寄付金は、プロのミュージシャンの派遣費用、日当支払い、今後の交流費用の一部に充てられます。報酬と呼べるほどは支払えないことは了解していただいています。

人類史は、太陽と水を、国家イデオロギー（宗教）に取り込みながら、資源と人を囲い込む国家を形成し、自

然破壊を続ける時を経て、国家民族宗教の枠組みが危機的な緊張状態を迎える時代に入っている。地球を覆う水は、人を含め、すべての生命を育む、奇跡的な存在である地球の象徴であるが、水の中には、太陽も人類を育んだ種（精液）もあると考えられ、人類社会を荘厳する音楽も表象されてきた。その音楽の原点が笛と太鼓である、というのが、アジア・シルクロード音楽祭を組織し活動してきた私の結論である。最後の形として、限りなく少数民族に敬意を表し、国家民族宗教を超えた理解親睦協力を模索するコンサートツアーを、ユーラシアンクラブ創設の原点となったシカチアリャン、ハバロフスク、そして太鼓を絆とした交流の地サハ共和国で音楽祭を開催し、アムール流域先住少数民族との交流ができそうな今を噛みしめている。

ご寄付の口座は下記のとおりです。
相愛信用組合　中津支店（００３）　口座番号　０１２８１９０
口座名　　NPOユーラシアンクラブ　愛川サライ　代表者　大野　遼

「加藤九祚先生を顕彰する会」設立発起人会（準備会）発足

加藤先生が亡くなったウズベキスタン共和国・テルメズ市とキルギス共和国のクラスナヤレーチカ、ロシア連邦ハバロフスク地方・シカチアリャン村の三か所に記念碑を設置し、ウズベキスタンのテルメズ市で「加藤九祚記念公園」の設置を提案したミルジョエフ大統領の提案やシカチアリャン住民が提案している「シカチアリャン村を世界遺産に登録申請する活動」を支援売る活動を準備中です。

▼　ウズベキスタン共和国ミルジョエフ大統領の「加藤九祚記念公園（6.5㌶）設置提案を受け、始動

日本建築家協会を通し、西アジアで活躍の建築家の協力を得て、黒川紀章建築都市設計事務所をあっせん。5月14日から20日まで、ウズベキスタン共和国を訪問。記念公園候補地を視察、協議、「基本計画」策定に一歩前進

昨年9月12日、ウズベキスタン共和国テルメズ市では靴作業中に倒れ、逝去した加藤九祚先生（NPOユーラシアンクラブ名誉会長、国立民族学博物館名誉教授　）の旧ソ連（現ロシアと中央アジア）と日本をつないだ功績を、後世に継承するため顕彰活動の母体となる「加藤九祚先生を顕彰する会」の立ち上げのため、服部英二・国連教育科学文化機関・元事務総長顧問、田中哲二・中央アジアコーカサス研究所所長、江藤セデカ・NPOユーラシアンクラブ理事長と相談しながら、顕彰する会設立発起人をお願いし、設立準備を進めてきました。その中、1月に入って、ウズベキスタン大使館を通して、加藤九祚記念公園の構想が提案され、2月に入り、大使かより「日本人の設計家による計画の策定と設計家の選定」が大野遼に依頼されました。私は、日本建築家協会を訪ね、協力を依頼し、西アジアやアフガニスタンで都市設計に携わる経験のある八木幸二・東工大学名誉教授、レックス・インターナショナルの橋本強司社長の知遇を得て、黒川紀章事務所の山田耕治社長を紹介していただきました。ウズベキスタン政府がこのプロジェクトを急いで軌道に乗せたいという強い希望を持っていることを配慮し、社長不在の中、黒川事務所を訪ね、意向を打診、基本合意しました。3月27日、「顕彰する会」準備会代表の服部英二さんと黒川紀章事務所の山田耕治社長、熊澤彰取締役らとウズベキスタン大使館を訪問し、ファルーフ大使、アジゾフ参事官と面会。ウズベキスタン政府の強い意向も伺ったうえ、派遣が正式に決まりました。一か月後の4月26日、黒川事務所は5月14日から20日まで、3人の建築家をウズベキスタンに派遣、加藤九祚記念公園候補地を訪問、協議を行うことを通知した。帰国後、「基本計画」を作成、本格的な作業が始まることになった。私は、黒川事務所からの建築家派遣に先立って、加藤九祚先生が発掘したテルメズの仏教僧院跡カラテパ遺跡の訪問も視察地に入れることなどを提案した。

近く、ウズベキスタン大使館もしくは参議院会館で、第一回「加藤九祚先生を顕彰する会」設立発起人会を開催する計画で関係者と調整中です。

▼　キルギス科学アカデミーのアマンバエヴァ上級研究員と意見交換

アマンバエヴァ研究員は、加藤九祚先生と一緒にクラスナヤレーチカ仏教遺跡を発掘しており、クラスナヤレーチカ遺跡に加藤九祚先生顕彰碑建立とクラスナヤレーチカ村博物館に加藤九祚コーナー設置を提案している。

「加藤九祚先生を顕彰する会」が正式発足されれば、クラウドファンディングの協力も得て、顕彰碑建設に動きたいと考えている。

▼ ロシア連邦ハバロフスク地方・シカチアリャン村に「加藤九祚記念環日本海交流・エコカルチャーセンター」シカチアリャン村から日露沿岸市長会、日露沿岸市長会に呼びかけ、ロシアと日本をつなぐシンボルとして！！

加藤九祚先生を知って５０年。お付き合いが始まって４０年余り。「つないだ人」を顕彰するため私の晩年を捧げます。「加藤九祚先生を顕彰する会」が正式発足されれば、皆さんと協力して、顕彰碑の建立と「加藤九祚記念環日本海交流・エコカルチャーセンター」設置について、クラウドファンディングの協力も得て、実現したいと考えている。

● なぜシカチアリャン村か？

大野遼は、加藤九祚先生がシカチアリャン村のナナイを含めたシベリアの先住・少数民族への敬意と強い興味を持ち、「北東アジア民族学史の研究」で学術博士を取得。大黒屋光太夫の運命と自身の運命を重ねていたことを知っている。加藤先生は、シベリア・旧ソ連（ロシア）と日本、国家民族宗教を超えた人類のあり方に、愁いを抱いていた。大野遼は、加藤先生とともに「北方ユーラシア学会」（故江上波夫会長）を設立するとともに事務局長に就任し、アルタイ山脈のパジリク王墓発掘、旧石器時代の遺跡調査、「アルタイ・シベリア歴史文明展」の開催、人類遺伝子調査、渤海港湾遺跡の調査、沿海地方と日本の狩猟技術等を含めた民族比較調査、などをコーディネートしてきた。

そして、人類遺伝子、考古学等を基にした「日本人と文化のバイカル起源論」が存在し、「2−3万年前に、バイカル湖周辺で形成された人々の集団が、１３０００年前に日本列島（まだ日本海が湖であった時代）に達した一ということを知った。その標識となったのがシカチアリャン村であった。シカチアリャン村のガーシャ遺跡から１３０００年前の土器が発見され、アムール川の右岸に位置するシカチアリャン村の岸辺にある玄武岩に刻まれた岩絵にある人物や舟の描画とそっくりな絵が、北海道のフゴッペ、手宮の洞穴絵画で発見され、シカチアリャン村民の間に伝承される神話、伝承には、日本のアマテラスの岩戸隠れにもかかわる生命樹、世界樹、射日神話が存在することが注目されてきた。私はシカチアリャンの自立支援のため２６年間、交流を続け、２０１５年〜１６年にかけて、加藤九祚先生とともに「岩に刻まれた古代美術　アムール川の少数民族の聖地シカチアリャン」展を大阪の国立民族学博物館、新潟県立歴史博物館、横浜ユーラシア文化館で開催してきた。

シカチアリャン村は、鉄のカーテンで仕切られた冷戦の時代にシベリアと日本をつないだ先駆者である加藤先生を偲び、顕彰するにふさわしい場所となっている。

偲ぶ会で紹介された昨年国立民族学博物館、新潟県立歴史博物館、横浜ユーラシア文化館で「岩に刻まれた古代美術　アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン」展を開催したシカチ・アリャン村の教諭ビクトリヤさんと村長ニーナさんの追悼メッセージ

私たち、ドンカン・ビクトリヤとドゥルジニーナ・ニーナは、加藤九祚先生と家族や友人の皆様に深い哀悼の気持ちをお伝えします。

加藤さんは、純粋な気持ちと温かい心を持った、非常に興味深い方でした。私たちは、加藤さんがロシアの歌を歌い人生について語るのを聞くのが楽しみでした。加藤先生は乾燥や寒さ、どんな自然環境にも負けず、毎年成長し花を咲かせるアザミの花を、ユーラシアンクラブのシンボルにしました。忍耐と持続性の象徴でした。加藤先生その人でした。そう、疲れを知らず、人生を楽しみ、陽気な人のまま加藤先生は私たちの記憶に残っています。（原文は、詩のような文章でした）

シカチアリャン村ドゥルジニーナ・ニーナ村長、シカチアリャン村中等学校ドンカン・ビクトリヤ教諭

ウズベキスタン大使、タジキスタン大使のメッセージ（大野遼が代読；両大使とも偲ぶ会に出席）

1）ファルフ・イスロムジョノヴィチ・トゥルスノフ駐日ウズベキスタン特命全権大使の挨拶

優れた人格者、偉大な学者、社会活動家、そしてウズベク国民の大切な友人であられた加藤先生のご逝去に際し、深い哀悼の意を表します。

加藤先生は、1963年に初めてウズベキスタンを訪問されて以来、歴史あるウズベキスタンの大地とホスピタリティーにあふれたウズベク人を深く愛してくださいました。加藤先生は、ウズベキスタンを第二の故郷とおっしゃっていました。

加藤先生は、ウズベキスタン科学アカデミーやその他の学術機関と密接に協力され、さまざまなプロジェクトに参加されてきました。そして、スルハンダリア州のダルベルジンテパ、カラテパ、ホルチャヤン、ファヨズテパにおいて、発掘調査をされてきました。加藤先生が熱心に打ち込まれた研究については、ウズベキスタンの歴史の教科書でも取り上げられています。

イスラム・カリモフ初代大統領は、加藤先生の多大なる学術的貢献をたびたび讃えてこられました。2014年5月にサマルカンドで開催された国際会議「中世に生きた東洋の学者、思想家の歴史的遺産と現代文明におけるその役割と意義」において、カリモフ大統領は、加藤先生は中央アジアの偉大な研究者であり、その学術的活動は中央アジアの歴史や民俗学、考古学、芸術の未知なるページを開いたと述べられました。

2002年には、ウズベキスタンと日本の友好関係の強化と学術交流の発展における加藤先生の多大なる貢献を讃え、先生の80歳のお誕生日に大統領令により、高位の国家勲章であるドゥストリク勲章（友好勲章）が授与されました。

私たちは、加藤先生のご逝去に深い悲しみを感じておりますが、先生が半世紀以上に渡り築いてくださった学術交流と友情あふれる温かい相互理解の絆は、今後も続き、発展していくと確信しております。

加藤先生がウズベク民族の貴重な歴史・文化遺産の研究やウズベキスタンと日本の交流の発展に果たされた絶大なる貢献は、ウズベキスタンの歴史に輝かしい記憶としてとどめられ、先生が残された研究成果は世界中の学者たちが何世代にもわたり、大きな関心を寄せ、学んでいくことでしょう。

加藤先生の記憶は、永遠に私たちの心に残っていくでしょう。

2)ハムロホン ザリフィ 駐日タジキスタン共和国大使館特命全権大使の挨拶

私は、かねて、中央アジアで、月氏やクシャン朝の仏教遺跡を発掘調査する加藤九祚先生を尊敬しており、お会いしたいという希望を、ＮＰＯユーラシアンクラブの大野遼会長、江藤セデカ理事長にお伝えし、タジキスタン大使館で面会した。その際、私が執筆し、世界７カ国で翻訳出版されている「タジクの黄金遺宝」日本語版出版の監修者をお受けいただけるようにお願いした。加藤先生は快諾され、帰国後相談することになっていた。思いもよらず、加藤先生は中央アジアのテルメズで亡くなった。大変悲しく、弔意を表するため本日の偲ぶ会に参加した。私は今でも、「タジクの黄金遺宝」日本語版の出版を加藤先生にお願いしたいという希望を持っており、加藤先生が名誉会長を務めるユーラシアンクラブが引き継ぎ、発行されることになった。私は、これに全面的に協力し、また加藤九祚先生の記念碑建立では、最高品質のパミールの大理石を提供することをお約束したい。加藤九祚先生は、中央アジアと日本をつなぐシルクロードを象徴する架け橋であると思う。

● 昨年11月3日に開催された「加藤九祚先生を偲ぶ会」の詳細は、ニュースレター177号（ホームページ「ユーラシアンクラブ」にアップロードされています。ご参照ください。

● 「タジクの黄金遺宝」日本語版については、現在大野遼が校正中です。

◎NPOユーラシアンクラブのシルクロードユニオンで活動する人を募集しています。

発行：特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ　発行人：江藤セデカ
住所：〒103-0022 東京都中央区日本橋室町 1-11-5 TEL：03-5376-9343
支部愛川サライ〒243-0303 神奈川県愛甲郡愛川町中津6314－1
TEL：046-285-4895 FAX：046-265-0167 E-MAIL：paf02266@nifty.ne.jp
郵便振替：00190-7-87777 ユーラシアンクラブ　お振込の場合：ゆうちょ銀行〇一九店　当座預金　0087777　ユーラシアンクラブ　会費、ご寄付はこちらへ。会費は正会員年間1口3,000円、学生会員1,000円、賛同会員2,000円。一口以上のご協力をお願い申し上げます。
http://eurasianclub.org/
2016 1201 Non Profit Organization Eurasian Club

編集後記：40年間私淑させていただいた加藤九祚先生が逝かれた。電話口で響く「やー」という九さんの声が聞こえる。アルタイ山脈を歩いている時、教えられた笑顔の大切さ、ジプシーの丘でジプシー一家を二人で訪ねたことも思い出す。九さんのそばで北方ユーラシア学会の事業、国家プロジェクト、音楽のシルクロードなどさまざまなユーラシアンクラブの活動をプロデュースできたことはありがたいことだった。まだやり残していることがある。それにめどが立ったら、追っ付けていきます。また一杯やりましょう。私が愛川町で４回開催したまちづくり講座で、私自身は見えるものがあった。太陽と水で誕生した国家民族宗教そして自然破壊の歴史（お再掲）